

■インタビュー 『ゆがみ取り SPAT』の著者・鹿島田忠史氏に聞く！

ゆがみ取り SPAT はいかにして生まれたか（上）

～それは操体法との出会いから始まった！～

【聞き手】あはきワールド編集人

ゆがみ取り SPAT の開発者である鹿島田忠史氏が著した『ゆがみ取り SPAT 上巻 総論・骨盤編』が昨年 10 月に上梓され、間もなくその続編の『ゆがみ取り SPAT 下巻 胸椎・頸椎編』が発行になる。鹿島田氏は東京都内で誠快醫院を営む医師である。そもそもなぜ医師が新しい手技療法を開発し、がんなどの難病患者の臨床でもその手技療法で施術しているのか。「普通の医者ではない」。誰しもがそう思うに違いない。インタビューを通して、普通ではない鹿島田氏の半生とゆがみ取り SPAT 誕生秘話に迫ってみる。

鹿島田忠史（かしまだ・ただし）

1948 年東京生まれ。1973 年横浜国大工学部建築学科卒業。積水ハウスなどに 4 年間勤務。その後医療に転進し、1980 年あん摩マッサージ指圧師、翌年柔整師免許取得。直後 1 年間温古堂にて研修する。1989 年東邦大学医学部卒業、同年医師免許取得。1991 年操体法の理念を柱とする誠快醫院を開業し、以来 30 年間がんなど難病を中心に診療している。著書に『がんを再発させない暮らし方』（主婦の友社）、『ゆがみ取り SPAT 上巻 総論・骨盤編』（ヒューマンワールド）などがある。



鹿島田忠史氏

—— 昨年 10 月、『ゆがみ取り SPAT 上巻 総論・骨盤編』を出版されましたが、その続編となる『ゆがみ取り SPAT 下巻 胸椎・頸椎編』を間もなく上梓されるそうですね。

鹿島田 はい、4 月 15 日発行です。DVD を撮影したのが、去年の 1 月から 2 月にかけてですから、それから 1 年以上かかりましたが、ようやく上下巻が完成しました。実は、100%自分で原稿を書いたのは、今回が初めてです。今まで出版した本では、一部か大部分をライターに手伝ってもらいました。今度の本では毎日少しずつ書き進み、気がついたら上下巻で 400 ページ、50 万字を超えま

した。体力の限界を感じる年齢となりましたから、ゆがみ取り SPAT の教科書的な本を書くのもこれが最後でしょうね。



『ゆがみ取り SPAT 上巻 総論・骨盤編』の表紙

—— まさに集大成といえそうですね。その『ゆがみ取り SPAT』についても、いくつかお聞きしたいのですが、その前に、鹿島田さんご自身の話をお聞かせ願えれば、と思っています。

鹿島田 何でしょう？

建築の道を歩むも、そこで挫折

—— 「人生いろいろ」って歌がありましたけど、人生はまさにいろいろ。鹿島田さんの経歴が、実に面白い。面白いというと、怒られそうですが、一流大学を出られて、有名企業に勤められて、順風満帆かと思いきや、そこで何があったのか、そのあと、あん摩マッサージ指圧師、柔道整復師、医師と資格を取られています。波乱万丈の匂いがしますが、なぜこっちの世界に入ってこられたんですか。

鹿島田 自分でも、小さい頃に想像していたのと全然違う人生を歩んでいることに、びっくりしています。中学校までは、そこそこの成績で都立の進学校に入学できました。まわりの人間が一流大学を卒業して、大企業や官庁に就職するのをめざしていたので、そうした空気に染まって一流大学に入学するのが目標になってしまいました。

—— こどもですから、朱に交われれば赤くなりますよね。

鹿島田 はい。ただ当時から、最終的には、人に使われず独立して仕事したいと思っていました。なぜ、そんなことを思ったかというと、江戸時代から続く商家の血が騒いだからかもしれません。父方の親戚には、いわゆる堅気のサラリーマンがほとんどおらず、漫画家や画家、囲碁棋士、自営業、IT企業経営者などの普通でない人ばかりでした。

—— わたしもサラリーマンには向いていないと思っていたので、その当時の鹿島田さんのお気持ち、よくわかります。

鹿島田 そこで、人に使われず独立して収入があり、聞こえのよい職業として思い浮かんだのが建築設計事務所の所長でした。それで、建築学科のある大学を受けたのですが、当時は高度経済成長時代の真っ盛りで人気があり、軒並み落ちました。軒並み落ちたのも当然で、進学高校入学イコール一流大学合格、という保証なんてどこにもないという、事実気づかなかったからです。

—— 受験失敗？ 浪人したんですか？

鹿島田 2年間も浪人し、何とか横浜国大の建築学科に入学できたのです。けれど、入ってから設計の講義を受けて大失敗だったことが分かりました。字は下手で書いた図面を見て自分でもうざりするし、建築の設計に必要なデザインの才能がまったくないのは、うまい人の図面を見ればすぐに気づきます。

これは困った、と思い悩み、デザインの才能がなくても何とかかなりそうな設備設計の分野に進んだのです。でも、こちらはこちらで建築の世界では脇役なので、下請けの仕事しか回ってきません。仕事量の割合に単価が低く、一生辛い人生が続きそうで、正直人生に希望が持てなくなっていました。

—— SPATの大先生がそんな挫折を味わっていたとは……。人生って順風満帆にはいかないものなんですね。

あま指師と柔整師のダブルライセンス取得へ

鹿島田 そうなんです。それで、どうしよう、と思い悩んでいるとき、家業の指圧治療院に目が向きました。

—— えっ？ 指圧治療院が家業だったんですか。

鹿島田 母があん摩マッサージ指圧師なんです。

—— そうだったんですか。それで、指圧治療院に目を向けたんですね。

鹿島田 正直、一流企業の社員です、といった見栄は張れないけれど、人には使われないし、仕事はコンスタントにあるし、収入も生活が成り立ちそうだったからです。それでも、最初は欲を出して医学部を受け直し、一つだけ一次試験を突破できたのですが、学費の問題で断念しました。そこで、あん摩マッサージ指圧の専門学校と、柔道整復専門学校の2校の昼・夜間部を掛け持ちし、1981年に卒業しました。

—— 今では、鍼灸と柔整のダブルスクールは珍しくありませんが、その当時、あま指と柔整のダブルスクールは珍しかったんじゃないですか？

鹿島田 はい、ほかにはいなかったように思います。

—— そのとき、鍼灸学校という選択肢はなかったんですか？

鹿島田 建築に行き詰まったときに、家業としていたあん摩マッサージ指圧になじみがあったので、自然にその方向に進んだのが一番の理由です。そのほかに、もともと工学部という「もの作りの世界」にいたので、「気」という眼に見えないものがピンと来なかったこともありますね。それと、母親が卒業したのが、カイロプラクティック系統の手技を取り入れている専門学校だったのです。それで、カイロがいう「諸病の原因は脊柱のゆがみ」という、何とも工学的発想に惹かれた面もあります。

操体法との出会い…橋本敬三先生の魔法のような施術にビックリ！

—— そうですね。そういう紆余曲折があって、斯界に入ってこられたんですね。では、操体法との出会いについて聞かせてもらえますか？

鹿島田 昭和 55 年（1980 年）にあん摩マッサージ指圧の専門学校を卒業し、翌年には柔整専門学校を卒業する予定でした。その年の確か 5 月頃に、秋葉原で操体法治療院を開業していた津田染鶴先生の操体法講習会があって参加しました。その時が、操体法に出合った最初です。

—— あま指の学校を卒業後すぐに操体法講習会に参加するとは、学校で習った手技だけでは満足しなかったとか？

鹿島田 当時は、あん摩マッサージ指圧の専門学校で修得したカイロ主体の手技をしていたのですが、矯正手技の安全性に不安をかかえていました。一番衝撃を受けた経験は、頸椎の矯正手技の実習で同級生から受けた矯正でむち打ち症になったことです。

—— 頸椎は怖いですね。カイロの事故はたまに耳にしますものね。

鹿島田 幸い、軽いめまいと頭痛が 2、3 日続いた程度で済んだのですが、暴力的矯正の怖さを感じました。こんな事故を臨床の現場で起こしたら最悪訴訟問題になる、と不安を感じていたのですが、ほかにできる技術もなくビクビクしながら仕事をしていました。

—— そんなことがあったとは……。

鹿島田 それで、何か安全で効果の上がる手技はないものだろうか、と探していたとき、たまたま操体法にめぐり逢ったんです。その講習会には、橋本敬三先生がおみえになっていて、直接施術を拝見したのですが、短時間に魔法のような効果を示していることにはビックリしました。

—— 橋本敬三先生を生で……。私も見てみたかったですね。

操体法の修得へ、いざ温古堂へ

鹿島田 その場で、これは本格的に操体法を修得すべきだと直感し、津田先生にどうすればいいですかと相談しました。すると、津田先生が「敬三先生の仙台にある温古堂では、見学生を自由に受け入れてありますよ」と、親切に教えてくれました。

—— それで、温古堂に研修に……。

鹿島田 そうです。その言葉を頼りに、最初は夏休みを利用して数日間温古堂にお邪魔し、見学させてもらいました。敬三先生の無駄のない問診と操体法の施術と指導を目の当たりにし、生涯の師にめぐり逢ってすごく嬉しかったです。

—— 最初は見学だけだったんですね。

鹿島田 そうなんです。そして、翌年の柔整専門学校卒業後の研修先として温古堂を選び、昭和56年（1981年）5月から1年間仙台に住んで研修に励みました。



翁先生の米寿祝い（1985年）

—— 1年間ですか。温古堂での研修生活はどういうものでしたか？

鹿島田 朝の診療が始まる少し前に温古堂に出勤？し、白衣に着替えます。温古堂では、夏でも火鉢に炭を焚いていて、その炭をおこすのが当時の助手今村時雄先生でした。橋本敬三先生のことをスタッフは、翁先生（おおせんせい）と呼んでいましたが、翁先生のお茶を入れるのは受付の阿部礼子さんの役割です。

—— じゃあ、見学生は何を……。

鹿島田 結局、私たち見学生は終業時の掃除くらいしか決められた仕事はなく、ひたすら来院する患者さんの診療を見続ける毎日でした。でも、不思議なもので、毎日目の前で操体法の手技を見てみると、自然とできるようになるものです。

—— 門前の小僧みたいですね。

鹿島田 まさにそうです。それと、週に1、2名くらい、全国から個性的なお客さまが来訪し、翁

先生と医療関連のお話をするのを横から聞いているのが楽しみでした。類は友を呼ぶと言いますが、まったくその通りで、来訪者は翁先生同様にユニークな先生のオンパレードでした。

—— たとえば、どんな先生が……。

鹿島田 たとえば、ヨガで超有名な沖正弘先生や薬石療法の伊藤善重先生、東北福祉大学の川上吉昭教授、東北大学の武田忠教授など、実に多彩な顔ぶれでした。何人かの先生とは、研修終了後もお付き合いが続いて、大いに啓発されました。

—— すごい顔ぶれですね。大先生のもとには人も集まるってことですね。ところで、研修は1年間ということでしたが、「見る」「聞く」だけで、何かさせてもらったことはなかったんですか。

鹿島田 温古堂での研修の最後に、2週間だけ翁先生の助手を務めさせていただきました。緊張しながらも、翁先生の方針をできるだけ忠実に実現するよう、患者さんに接したことは一生の思い出になっています。

心に残っている翁先生の言葉

—— 「見る」「聞く」だけかと思っていたら、最後にやらせてもらったんですね。よかったです。ところで、翁先生はいろんな印象に残る言葉を残されていますが、翁先生の教えで最も印象に残っている言葉は？

鹿島田 最も印象に残っている言葉は、「野次馬根性が大事」と「嘘か真かやってみろ」ですね。最初の「野次馬根性が大事」というのは、要するに好奇心を持ち続けろ、だと思います。言うまでもありませんが、決められたことだけを100%忠実にしても、オリジナルを超えることはできません。最初はコピーの段階をクリアしなくてははいけません、そこを過ぎたら新しいことに挑戦し、失敗を乗り越えていくしか進歩はありません。新しいことに挑戦する原動力が、好奇心というわけです。

—— なるほど……。

鹿島田 2番目の「嘘か真かやってみろ」は、何であっても本当に正しいかどうか、試したり調べてみなければ分からない、という当たり前のことを言っているんです。でも、実際にはこれが難しい。人間って、世間の常識や予断の固まりのようなもので、マスコミが報道している、偉い学者が言っている、欧米ではそうなっている、というだけで信じます。本当に正しいかどうか、自分で試したり自分で詳しく調べないで、盲信するのです。操体理論の基本法則「後が気持ちいいは、体にいい」では、気持ちよさは本人しか分からないので、ある治療や健康法が有効かどうかは、試さなければダメです。誠快醫院の診療も、この基本法則に沿って進めていこうとするんですが、ほとんどの場合、患者さんが信じ込まされている医学常識との戦いとなってしまいます。

温古堂での研修で得た最大の収穫は？

—— 「後が気持ちいいは、体にいい」は『ゆがみ取り SPAT』の本の中でも頻繁に出てきますので、私の頭にもしっかり刻まれました。温古堂での1年間の研修、収穫はありましたか？

鹿島田 たいていの方が研修に行くときに期待するのは、あわよくば秘伝を含めて技術の修得だと思います。実際、私も講習会や著書で発表されていない秘伝に近い技術があるのか、あれば持ち帰れたらラッキーと期待していました。ところが、毎日温古堂に通っても、使われている手技は翁先生の本や講習会で見たパターンそのままでした。

—— そのまま……。

鹿島田 ある日、亡くなった佐藤武先生からお茶をご馳走になったとき「仙台に来た目的は何なのですか？」と聞かれて、どう答えたらよいか分かりませんでした。でも、仙台に来てがっかりしたかといえば、まったく逆で、毎日翁先生のそばにいて、来所者との会話に耳を澄ませていることが、楽しくて仕方ありませんでした。そして、気づいたのです。本当に大切なのは、操体法という技術の底に流れる医療・健康思想だと。そこに気づいてからは、温古堂備え付けの翁先生蔵書を借りて読んだり、当時東北大学の確か大学院生だった加藤平八郎先生と議論をしました。このときの学習や議論が、その後に操体法の理解を深めるのにとっても役立ちました。何年も後になって、操体や操体法といった呼び方が、手技療法や医療・健康思想の両面を含んでいる状態を整理したことにつながりました。

—— そういえば、本の中でも医療・健康思想の大切さについては触れられていますね。

鹿島田 そうなんです。『ゆがみ取り SPAT 上巻』でも書いたんですが、今は手技療法の意味では「操体法」を、医療・健康思想の意味では「操体理論」を使うように提唱しています。

—— あ、そういえば、温古堂での収穫といえば、「操体法」や「操体理論」以外に、大収穫といってもいいかもしれませんが、大事なことを忘れていませんか？

鹿島田 ……???

—— その時に、見初めて伴侶とされたのが奥さんだとか……。



向かって右端が新婚の奥さん。1981年6月30日、温古堂にて

鹿島田 家内とのなれそめに触れるのは何だか恥ずかしいのですが、勇気をふりしぼってお話しましょう。研修を始める1年前の昭和55年（1980年）秋頃に、温古堂に1泊2日の短い見学に行きました。その時、たまたま岩手県の花泉町から数人の保健師さんが操体法の研修に来ていました。その晩、懇親会で一献傾け、酔った勢いで「彼女を探しているのだけど、誰かいい人いませんか」とある保健師さんに言ってしまいました。

—— おお……。

鹿島田 帰京してから1週間後ぐらいだったと記憶していますが、その人から「友人でお相手を探している人がいる」と連絡があり、履歴書と写真が送られてきました。ピンと来るものがあったので、すぐに「お会いしたい」と返事して、確か10月の末頃に仙台のワシントンホテルのロビーで逢いました。

—— 早いですね、行動が。それで……。

鹿島田 実は、初めて会ったときの忘れられないエピソードがあるんです。当時は新幹線がまだできていなくて、約束の時間に間に合うよう早朝の特急に乗って仙台に向かったのです。ところが、途中で信号機のトラブルで到着が2時間遅れました。今なら携帯電話で連絡できるのですが、そのときは何もできず焦るばかりでした。仙台駅からタクシーを飛ばして、ワシントンホテルに着くと、辛抱強く彼女が待っていてくれて感激しました。遅い昼食を食べながら話し始め、時の経つのを忘れてすぐに波長が合う人だと直感しました。

—— 誰かの言葉を借りれば、ビビッと来たわけですね。

鹿島田 そうなんです。一目惚れ、という言葉がありますが、まさか自分に起きるとは思いませんでした。その後は、2週間に1回ぐらい行ったり来たり遠距離デートを続け、翌年昭和56年（1981年）4月19日に翁先生の仲人で結婚式を挙げました。

—— 翁先生が仲人だったんですか！

鹿島田 結婚後間もなくから、私は研修のために仙台に引越し、家内は東京と仙台の半々で生活するという変則的な新婚生活となりました。きっと東京でさみしく心細かったと思いますが、一人で頑張って実家を手伝い支えてくれた家内には、感謝の気持ちしかありません。

（次号へ続く）